雑録

益城町文化財資料室における文化財レスキュー

―水損した屏風、武具、工芸品に対する応急処置の一事例として―

熊本県教育庁教育総務局文化課
村上　幸奈

【キーワード】文化財レスキュー、水損資料、豪雨災害、屏風、武具、工芸品、

はじめに

二〇二三年（令和五年）七月三日、線状降水帯により熊本県に豪雨が発生し、益城町を流れる木山川（図1）(1)が氾濫した(2)。

本稿は、木山川の氾濫により浸水した益城町文化財資料室において、熊本県教育庁教育総務局文化課（以下、「県文化課」という。）が同四日に行った文化財レスキューについての記録である。筆者は、県文化課文化財活用班の美術工芸品担当学芸員としてレスキューに参加した。

第一章　益城町文化財資料室について

益城町文化財資料室（以下、「資料室」という。）は、旧益城中央小学校を利用した二階建ての文化財資料室である。

被災時、資料室の一階には、長持に収納され床置きされた屏風、工芸品及び武具等のほか、スチール棚上に古文書等の資料が置かれていた。二階には土器を主とした考古資料及び備品等が保管されていた。

資料室の南側には木山川が隣接する（図2）。資料室が立地する地盤の標高は十一・二メートルであるのに対して、木山川の標高は十一・七メートルと、資料室がやや低い位置に所在している(3)。

線状降水帯により氾濫した木山川の水と土砂が資料室一階に流れ込んだことで、床置きされていた資料が水損した。一階に設置されたスチール棚上の資料及び二階は浸水を免れた。

第二章　文化財レスキュー概要

第一節　七月三日(月)

午後五時、益城町生涯学習課から県文化課へ、以下の情報共有及び問合せがあった。

・木山川の氾濫に伴って資料室が被災し、一階に保管していた資料が水損した。

・県文化課による文化財レスキュー事業立上げの予定はあるか。

・水損した屏風や漆器の応急処置方法を知りたい。

県文化課は、現時点で文化財レスキュー事業を立上げる予定がないことを伝え、令和二年七月豪雨の際に作成した資料を提供した。また、県文化課文化財活用班の連絡網を活用して班員に応急処置方法や文化財レスキューに関する情報の提供が呼び掛けられた。これを受けて、各分野の学芸員が論文や防災マニュアル等をＰＤＦデータで共有した。

第二節　七月四日(火)

第一項　状況確認

午前八時半、益城町生涯学習課から県文化課へ、資料室の二階に水損資料をすぐに引き上げられる状況ではないこと、まずは資料の状態を確認する予定であることが共有された。県文化課からは、四名の学芸員が確認に立会うこととなった。

午前九時半、確認のため資料室に益城町生涯学習課の学芸員三名、県文化課の学芸員四名が集合した。すでに水は引いていたものの、床は泥に覆われ、湿った状態となっており（図3、4）、カビの匂いが発生していた。

水損資料を確認したところ、床置きされた木製の長持の中には屏風、工芸品、武具が保管されていた。長持内部にまで水が染み込んでおり、床下約十五センチメートルが浸水したことが分かった。

以上の状況確認により、まもなくカビが発生する可能性があることや、折りたたまれた状態で水損した屏風は濡れたまま放置すると本紙同士が貼り付き開けなくなる可能性があることを考慮し、当日中にすべての資料の風乾作業を行う必要があると判断した。

第二項　風乾場所の確保

資料を風乾させるため、浸水を免れた資料室二階や、一階に設置された机を利用することとした。

二階には土器等の出土遺物や備品等が保管されていたため、まずはこれらを部屋の隅に寄せて風乾場所を確保する作業を行った。空いたスペースにブルーシートを敷いて養生し、水や泥による汚れを防止した。

第三項　各資料の応急処置―屏風

一階に床置きされた長持には、計二十三隻の屏風が折り畳まれた状態で収納されていた。約十五センチメートルが浸水し、多くの作品が本紙まで浸水被害を受けていた。

長持ごと二階へ移動させてから屏風を取り出し、ブルーシートの上に番号を書いた紙と共に直置きして風乾させた。部屋の両側に窓が設置されていたため、窓と垂直になるように屏風を立てることで、風による転倒を防止した（図5）。

屏風を取り出した空の長持は、床や机に木製の棒を敷き、その上に裏返して置くことで、内部に湿気が留まらないよう工夫した（図6）。

第四項　各資料の応急処置―武具等

長持に収納されていた武具等は、気泡緩衝材や綿座布団に包まれた状態で水損していた。梱包材を取り除き、キッチンペーパーで水分を拭って風乾させた。

一階に設置されていた机にメッシュ状の天箱を裏返しに並べることで風通しを確保した（図7）。

第五項　各資料の応急処置―工芸品

工芸品は、布製の袋や風呂敷もしくは気泡緩衝材に包まれ、木箱に入れられた状態で長持に収納されていた。工芸品は、陶磁器、竹製の茶杓や籠、漆器等、様々な素材のものがあった。

工芸品を風乾させるための机や台を広げる場所を十分に確保することができなかったため、床に積み上げられた本の上にベニヤ板を敷き、気泡緩衝材と新聞紙で水濡れを防止した簡易的な台を作成し、作業を行った（図８）。

梱包材を取り除き、布製の袋等は自然乾燥させることとした。工芸品はキッチンペーパーで水分を拭き取ったほか、泥汚れが著しいものはウェットティッシュで拭ってから風乾させた。

第三章　振り返り・今後の展望

第一節　作業人員の確保

先述した風乾場所の確保作業には、益城町生涯学習課の学芸員三名、県文化課の学芸員四名が従事した。しかし、午前中に確保した風乾場所が足りなくなったため、午後に県文化課から職員四名、益城町から職員五名の応援を呼んで再度スペースの確保作業を行う必要が生じた。

文化財レスキューの現場では、専門職員の確保に意識が向きがちであるが、まず初めに作業場の確保や荷物の移動等の単純作業が必要となる可能性がある。初動では専門性に限らず十分な人員を確保することで、迅速なレスキューの開始に繋がると考えられる。

今後、同様の状況があった場合には、午前中に可能な限り多くの人員を確保し、作業の進捗状況により徐々に人数を減らしていく体制を提案したい。

第二節　経験・実践の重要性

今回の文化財レスキューでは、屏風が対象の大半を占めた。しかし、参加者のうち、屏風の取扱い経験があったのは筆者のみであり、筆者も屏風の取扱いについて十分な経験や知識があるとは言い難かった。

そのような状況で風乾の必要性や応急処置方法について判断することができたのは、わずかとは言え、学芸員実習等の経験と、過去の災害対応について文献や報告を目にしたことがあったためと思われる。

風乾作業の際には、長持から屏風を取り出して床置きする必要があったため、その場で参加者に屏風の扱い方を説明し、二名一組で作業を行った。簡易的な説明のみで実際の作業を行うことになったものの、すべての屏風の風乾を終える頃には扱いに慣れたように見え、実践の重要性を感じた。

市町村に配置人員の少ない分野の文化財―特に美術工芸品や有形民俗文化財等―の取扱い及び応急処置方法については、県所属の学芸員が助言を行うことが想定される。しかし、専門分野の学芸員のみが助言にあたる場合、被害が甚大であるほど、負担が大きくなる可能性が高い。県所属の学芸員は、専門に関わることなく様々な分野の研修等に参加して実践を積み、緊急時の対応に備える必要があると思われる。経験を積んだ学芸員が経験の浅い職員や市町村に向けた研修を開催することで、その輪を広げていくことができるのではないだろうか（4）。

第三節　文化財の保管方法について

今回被害を受けたのは、床置きされた資料であり、棚上や二階に保管されていた資料は浸水を免れていた。高い場所での保管は地震による転落等の被害が懸念されるため、すべてを棚上に保管すべきとは言い難いものの、浸水に有効な対策として再度共有しておきたい。

また、梱包材についても留意が必要と思われた。綿座布団や薄葉紙、段ボール等の梱包材は、文化財を運搬する際にしばしば用いられるものの、温湿度管理が十分でない環境に長期間置くと、カビや虫の発生源になってしまう可能性がある。水損被害にあった文化財の応急処置をすぐに行うことができない場合には、最低限の対策として、梱包材を取り除き、文化財への付着やカビ、虫の発生を防ぐ必要があるだろう。

第四節　文化財害虫について

屏風の風乾作業中、長持の内部からシミと思われる虫が出てきていることに気付いた。浸水以前から生息していたものか、災害に伴い発生または増加したものかは判断がつかないものの、資料室に保管されている文化財に悪影響を及ぼしている可能性が高いことを益城町生涯学習課と共有した。

文化財レスキューの翌週、筆者が参加した東京文化財研究所主催の研修(5)で、害虫の発生について相談したところ、害虫トラップを譲って頂くことができた。今後、モニタリングを行い、専門家にも相談しながら対策について検討していくことができればと考えている。

先述のように、研修に参加することは知識や経験の獲得に直結する。またそれだけでなく、様々な分野の専門家と情報を共有し、相談先を増やすことにも繋がると思われる。県内外における研修参加は、文化財の被災に対する有効な手段の一つとも言えるだろう。

おわりに

以上、二〇二三年（令和五年）七月四日に県文化課が行った益城町文化財資料室での文化財レスキューについて報告し、今後の展望について述べた。各資料の応急処置方法については、すでに多くの事例が報告されているため、事例としての有効性は低いかもしれない。しかし、こうした報告は事例の共有だけでなく、記憶の風化を防ぐ機能も持つように思う。

文化財防災センターが提唱する「文化財防災スパイラル」では、発災後の救援（レスキュー）、復旧復興、減災対策、緊急事態への備えというプロセスを辿って、防災力を高めていくことが可能とされている。また、このスパイラルについて考えるとき、人は「忘れてしまう」生き物であることも念頭に置かなければならないという(6)。

今回レスキューされた資料の一部については、益城町生涯学習課によっていち早く調査が行われ、その成果とともに企画展(7)での公開が行われた。レスキュー後の一般公開は、まさに記憶の風化を防ぐ取組みの一例と言える。

本報告や企画展が多くの人の目に留まることで、今後の文化財防災や関連する活動の一助となれば幸いである。

謝辞

本報告の執筆にあたり、レスキュー現場の第一線で動かれた益城町生涯学習課　森本星史学芸員より御助言を頂きました。

また、レスキュー及びその後の処置方法について、文化財防災センターの皆様から懇切丁寧な御指導を頂きました。東京文化財研究所での研修においては、講師及び受講者の皆様から様々な御助言を頂戴しました。

末尾ではありますが、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

本文註

（１）　木山川は、熊本県中北部を流れる緑川水系の一級河川で、流域面積は一八三・五平方キロメートルである。南阿蘇外輪山の冠ヶ岳を源流とし、熊本市東区で加勢川に合流する。『角川日本地名大辞典　４３　熊本県』（角川書店、一九八七年）

（２）　二〇二三年（令和五年）六月二十八日から七月六日にかけ、梅雨前線等の影響により、沖縄地方を除いて全国的な大雨となった。七月一日から三日は山口県や熊本県、鹿児島県奄美地方で線状降水帯が発生した。「令和五年梅雨前線による大雨に係る被害状況等について」（内閣府、二〇二三年七月十八日、https://www.bousai.go.jp/updates/r5_06ooame/pdf/r5_06ooame_06.pdf　最終確認日　二〇二三年十一月一日）。

（３）　「GPS対応地形図アプリ　スーパー地形」（Kashmir 3D）を用いて益城町生涯学習課が計測したデータを御提供頂いた。

（４）　以前筆者は、県文化課主催の「令和四年度　熊本県文化財保護行政担当者研修（第一回）」において、「美術工芸品の調査・保存・活用～仏像の日常管理～」をテーマに研修を行った。人吉市内の寺院を会場にお借りし、実際に仏像や堂宇の清掃をすることで、仏像の取扱いや保存方法を実践的に習得することを目的に企画したものである。この試みについては別稿を期したい。

（５）　令和五年度　博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）

期　間　二〇二三年（令和五年）七月十日から十四日

場　所　東京文化財研究所

受講者　三十名

（６）　髙妻洋成・小谷竜介・建石徹編『入門　大災害時代の文化財防災』（同成社、二〇二三年）

（７）　令和五年度益城町文化財企画展　美文字が光るとき―君の一文字に恋してる。

期　間　二〇二三年（令和五年）十二月一日から二〇二四年（令和六年）一月二十八日

場　所　益城町交流情報センター

主　催　益城町教育委員会

後　援　熊本県教育委員会、熊本県文化財保護協会、熊本日日新聞社、ＦＭ７９１

図版

図１　木山川沿いの車道（県文化課撮影。）

図２　益城町文化財資料室　位置図（国土地理院ウェブサイト

https://maps.gsi.go.jp/#17/32.786747/130.825485/&base=ort&ls=ort&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=m
より引用、加工。最終確認日　二〇二三年二月十三日。）

図３、４　被災時の様子（県文化課撮影、一部加工。以下同じ。）
図５　屏風の風乾作業
図６　長持の風乾作業
図７　武具等の風乾作業
図８　工芸品の風乾作業

二〇二三年十一月十三日受付　二〇二四年二月二十八日受理

図1　木山川沿いの車道

図２　益城町文化財資料室　位置図

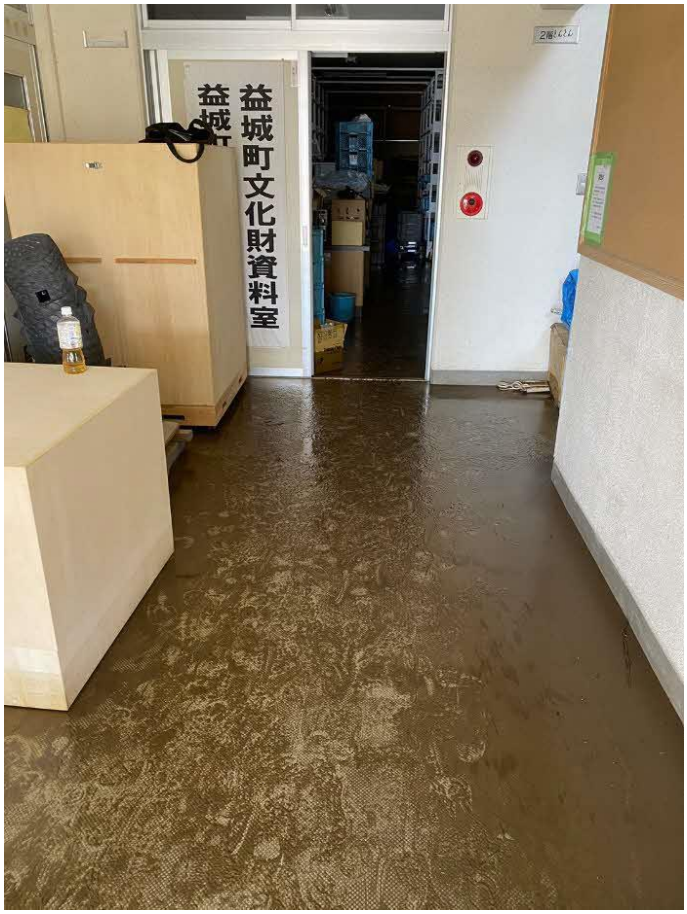

図 3　被災時の様子

図 4　被災時の様子

図 5　屏風の風乾作業

図 6　長持の風乾作業

図 7　武具等の風乾作業

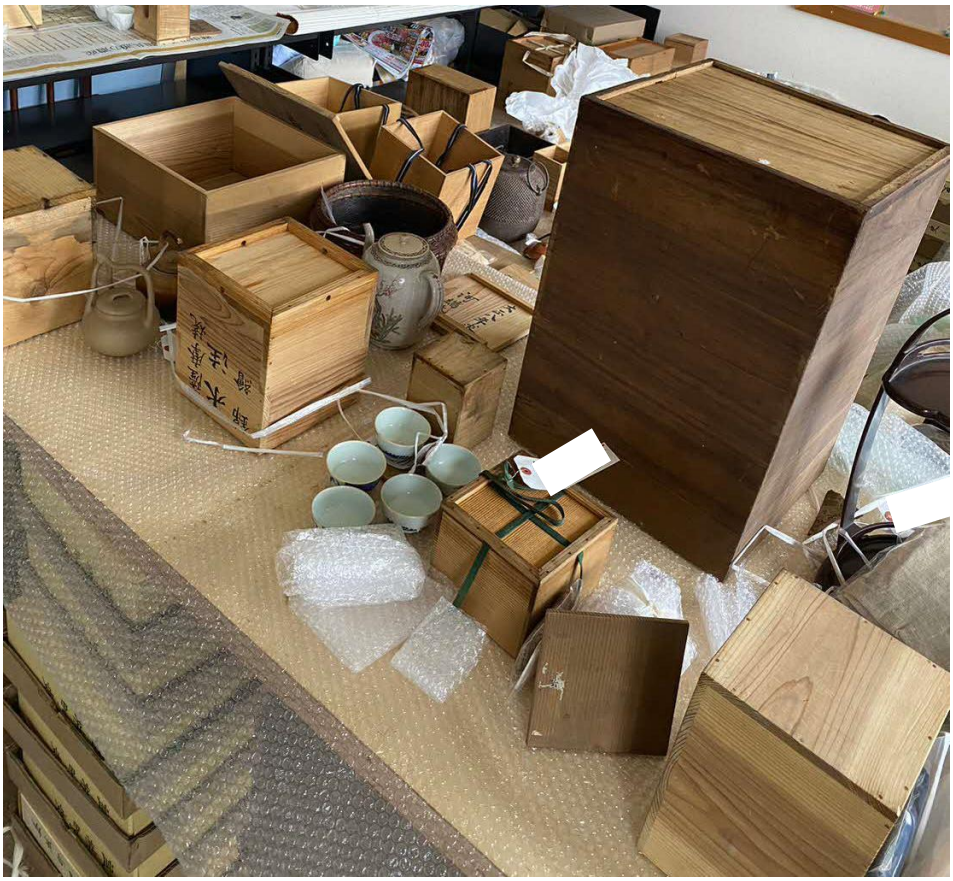

図 8　工芸品の風乾作業